
キセキ

alice

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キセキ

【Nコード】

N2509V

【作者名】

alice

【あらすじ】

中世イギリスを舞台にヒストリカルロマンスを題材にしています。

この時代では珍しいイギリス人の父と東洋人の母を親に持つセリーナそんな彼女の恋の物語。

思いつきで恋愛小説を書いてみました。

第1章

振り返ってみるとそれは本当に偶然で…必然で…キセキのようだった…私は父がイギリス人母が東洋人と言うこのご時勢では珍しいハーフ…父はロンドンではちよつと有名な貿易商を営んでいて私と母と姉はお貴族様ではないが裕福な家庭の常として上流階級に属しており平和だが幸せな日々を送っていた。

私は当時18歳…2年前に社交界にデビューしたが今だ貰い手は決まっていなかった…両親や周りは心配していたと思う…私は気ままな独身としての人生を楽しんでいた。6匹の猫1匹の犬そして父が世界中から集めてくれる本に囲まれいつか父と一緒に船に乗り世界を廻って見たいと夢を見ていた。

そんな私、セリーナ・サクラ・ヴィオレットのお話…物語の始まりは4年前私が18の誕生日を迎える1ヶ月前1月の雪の降らない刺すように冷たい空気に包まれた日の朝から始まる…

眩しい朝日にカーテンの隙間から照らされ目を細めながら私は目が覚めた。冬は大好き。寒い中暖かく過ごす幸せ…でも寒さにはめつきり弱い私はベットの中で寝返りをうち朝日から顔を背けるともう少し暖かなベットの中で過ごせないかとウトウトと考えていた。

「お嬢様お目覚めですか？本日は珍しいぐらいいいお天気ですよ」鼻歌交じりに侍女のマージが起こしに来た。

「うゝんあと少しだけ」暖かい布団の中に身を沈め私はマージの起きなさい攻撃から身を守ろうと布団を強く握り締めた。

「なにおっしゃってるんですか！もう皆様起きて身支度をされてらっしゃいますよ！セリーナ様はほっておくと何時までも寝ていらつしやるんですからね！！」

言つとマージはいつもの様にセリーナの布団を剥ごうと力いっぱい引つ張った。セリーナも負けじと引つ張ろうと思つたがどうせ抗つたところでまた眠りの世界に戻るはずも無く観念してベットから這い出てきた。

「まったく、いつもいつも往生際が悪いですよ！お湯を入れたポットを用意してありますから顔を洗つて来て下さい。お召替えを用意しておきますから。」マージはぷりぷりと指図をすると侍女とは思えない手荒さでベットを整えて隣の部屋へと行つてしまった…

あくびを手で隠しながらセリーナは寒いと言つて身震いすると温かいお湯を使つて洗顔を済ませ暖かい部屋へと急いで戻つた…

朝食の席に下りていくと珍しく家族全員がダイニングに揃つていた。3歳年上の姉ビビアンは3年前に恋愛結婚をしている。旦那様のオルソンはとても優しく我儘で気性の激しい姉をととても大切にし

てくれている。2年前の秋に長男を授かっておりリンディーは今や我が家のアイドル的存在だ。

オルソンは国の役職に就いており裕福とは言えないが我が家の自由な気質の中姉の恋愛結婚は許された。私も当初は反対したが可愛いらしいリンディーと一緒にいるとなんて浅はかだったのかと後悔することも多い。

夫婦はロンドン郊外に住んでおり会えるのは月に1、2回程度だ。私としてはもつとリンディーに会いたいのだが馬車で片道3時間の距離を考えると我儘は言えない。

「あらセリーナおはよう。今日は早いね？雨が降らなきやいいけど」ニヤリと貴婦人らしからぬ笑みを向けながらビビアンが膝にリンディーを抱きながら挨拶をしてくる。

「おはようお姉さま、寒かったからもう少しベットに居たかったけれどこんなサプライズがあるなら起きて来て正解だったわ。」セリーナは嬉しそうにリンディーを自分の下に呼び抱きしめて頬擦りした。

「おはようセリー、君が喜ぶだろうと思って内緒で馬車を飛ばしてきたんだよ。」オルソン2人の様子を嬉しそうに眺めている。

「おはようお兄様朝からとても幸せな気分よ、」セリーナは嬉しそうに義理の兄に挨拶した。セリーナは子供の頃から兄が欲しかったので義理の兄の事は本当の兄の様に慕っている。

セリーナはリンディーと遊びながらチラリと父を見たいいつもは仕事に忙しく家を開けがちなのに今日は本当に珍しく家族が揃っている。

「さあ、セリーが起きて来たから朝食にしましょ、」母の雪が嬉しそうに立ち上がった。

母の雪は東洋人だ。遠い異国のお嬢様だった。父と同じ貿易商の親を持ち異国の地でも有数の名家の娘だったと言う。背は低く髪も瞳も真つ黒で肌は名前の通り真つ白で此方ではエキゾチックビューティーと言われている。

私の髪は母にそっくりで真つ黒。しかし瞳の色は父に似て明るいグリーンだ。子供の頃に金髪に憧れて母に何度と無く何故自分の髪はこんなに黒いのかと愚図った事がある…それだけ私の髪の色は此方では珍しい色とされている。

久しぶりに家族揃った朝食はとても楽しくリンディーが何が食べれる様になったのを見届けるだけで楽しい。可愛い甥っ子の口の周りに付いた汚れを拭き取っているとリンディーの乳母が後ろでオロオロしているのが見えた。

「セリー…そんなに子供が好きなら貴女も早くお嫁に行って自分の子供の世話を焼きなさい、乳母が困ってるわ…自分の子供ならリンディーなんて目に入らないほど可愛く感じるものよ。」ビビアンが困ったようにセリーナを咎める。

「結婚なんて…まだまだ考えていないわ。子供は欲しいけど今は可愛いリンディーのお口の周りを拭いてあげる幸せをかみ締めているの。」

娘の結婚願望の薄さに母雪はそつと溜息を付き夫を見てみると夫は何も気にならないのか朝刊を広げて目の前のやり取りには気付く様子も無い。

そんな様子に気付いたビビアンが母の方を見て困ったように首を傾げ2人だけで深く溜息を付きリンディーの食事の様子を微笑んで見つめているセリーナを見やった。

朝食後男達は新聞片手に話し込んでしまったので今日は天気も良いしリンディーを乳母と侍女達に任せ女達は社交場に出かけることにした。

第2章

3人が馬車で到着すると社交場は多くの人で溢れ賑やかだった。母と姉はそれぞれ友人を見つけ噂話をさかせに行ってしまったのでセリーナは仕方なく隣接する会員制の貸し本屋に行くと告げて社交場を後にした。

貸し本屋は社交場に比べると人が少なく図書館の様に広々として静かだった。セリーナは読書が趣味で誰にも邪魔されなければ一日中でも本を読んでいる事が多かった。

最近のお気に入りのお流作家の本がある辺りへとキョロキョロしながら進んでいく。貸し本屋は図書館と違って本を借りる事が出来、種類も多彩であった。この時代図書館には学者・貴族などと言った上流階級しか入る事を許されずまた置いてある本も借りることは出来ず書館内で読むことしか許されていなかった。

気になっていたお流作家の最新作を無事手に取るとセリーナは嬉しそうに壁際の本を読めるソファに腰掛、2人が探しに来るまで此処でのんびりと本を読んで過ごそうとペラペラと本を捲り読み始めた。

半時位過ぎた頃だろうか突然話しかけられてセリーナはその相手を見上げた。

自分の方に少し屈みながら困った様子をするその男性はとても美しく見えた。その髪は金に近いブラウンで瞳の色は濃い青をしていた。自分の容姿とは対照的な男性はなおも困った表情でセリーナを見つめている。

何か話しかけられたことを思い出しセリーナは意識を長いことその男性を見つめてしまった事に気付く頬を赤く染めて慌てて答えた。

「失礼しました、何かおっしゃいましたか？私、本に夢中になってしまって…」しどろもどろに答えるセリーナを見てその男性はクスツと微笑み姿勢を正すとセリーナに話しかけた。

「失礼、お嬢さん。驚かすつもりは無かったのですが…ソファのお隣に失礼しても宜しいですかとお尋ねしたのですが…」男性は優しく微笑むとセリーナの座っている大きなソファの反対側の端っこを手で示した。

セリーナはビックリして思わずどうぞと頷いてしまった…

男性が有難うと言って自分の隣に腰掛、手に持っていた本をペラペラと捲り読み出したのをボーっとしながら見つめていて突然気が付いた。

付き添い人も無く見知らぬ男性と2人きりでソファに腰掛けているとはなんと恥ずかしいことをしてしまっているのだろっと思いいで立ち上がった。

すると立ち上がったセリーナに気付き男性が本から視線を上げてセリーナを見た。

何か言わなくてはとセリーナは思いオロオロと話しかけた。

「本を読んでいらっしやる場所申し訳ありません。見知らぬ方と長時間過ごすことは出来かねますので私は失礼いたしますのでどうぞお気になさらないでゆつくりと本を読んでください。」セリーナは顔を真っ赤にして失礼しましたと言って立ち去ろうと踵を返すとその男性が慌てて話しかけてきた。

「私も気付かず申し訳ありませんでした。貴女のようなご令嬢が付き添いも無くお一人でいらっしやるのに気付かず厚かましい真似をしてしまつてすみません。」

「此処は私が立ち去りますのでどうぞごゆっくりとお過ごしください。」そういつて男性は優雅に立ち上がるとセリーナの手を取り手の甲にキスをすると笑顔で立ち去ってしまった…

セリーナは顔を真っ赤に染めながらキスをされた手をそっと撫でて突然のできごとに驚きボーッと暫く男性が去った後姿を見つめていた。

一体何があったの？私ったら恥ずかしいわ……ストーンとソファに腰掛け今までのやり取りを思い出していた。

結局あの方のお名前も聞くことも無かったわ…優雅な身のこなしの方だったわ…本を読む姿もさまになって…

セリーナはそんな事を考えている自分が恥ずかしくなって本を持つと慌てて貸し出しの手続きをしにカウンターへと向かった…

溜息を付きながら貸し出しボードに名前と本の題名を書こうと思ったときふと上の貸し出し者の名前を見ると其処には（スタンリー・ギャルウェイ・ホレス・ウォルポール著 オトラント城）と書いてあるのを発見し頬が再度高揚した。

先程の男性が読んでいたのは最近流行のホラー小説で有名な物だった…セリーナも読んでみたいと思っていた物なのでその題名が頭の中に残っていたのだ。

「スタンリー・ギャルウェイ様…」ポツリとその名前を呟きサッサと自分の名前と著書名を書くとカウンターを後にし社交場へと戻っていった…

第3章

セリーナが社交場に帰ると其処は相変わらず人で溢れていた。この社交場はそもそも階級としては中の下ゝ上の下位の人たちが良く利用する場である。

常にダンスが出来るよう演奏がされており若い男女のが知り合ったり適齢期の子を持つ御婦人方の交流の場として使われているのである。

セリーナは母と姉を探して社交場の中を少し速い足取りで移動していたが顔見知りの令嬢達に引き止められたりしてその足は中々進まなかった…

「あら、セリーナ様御機嫌よう。いらっしやっていたのね、気付きませんでしたわ。」

なるべく目を合わせないようにと節目がちに先を急ぐセリーナを3人の令嬢が目ざとく見つけ声をかけてきた。

「あらポーシャ様御機嫌よう。今日は母と姉と来ておりましたの。セリーナは声を掛けて来た3人を見回し微笑みながら見つめるポーシャの最後の嫌味に気付いて少し冷たい声で答えた。

気付きませんでしたと言うのはこの珍しい髪の色に対する嫌味なのだ。ポーシャの髪は少し赤みがあったブラウン…セリーナが髪の色を気にしているのを分った上での嫌味である。他の2人の令嬢はいつもポーシャと一緒に居る取り巻きだ。

「お母様とお姉さま？見かけませんでしたわ、今日はこの社交場もとても混んでいるでしょう？私達そろそろ失礼してもう少し空気の良い所へ行こうかと思っていましたの、お母様達見つかると思いますわね…」ポーシヤはクスツと笑うと口元を扇で隠した。

取り巻き2人も同じ様に扇で口元を隠しクスクスと笑うとポーシヤに付いてそれでは御機嫌ようと言って出口へと行ってしまった。

ポーシヤはセリーナと同じ階級でポーシヤの父も同じく貿易で一儲けしていた。何かしらという張り合おうとしてセリーナの髪や瞳の色をチクリチクリと言いドレスやリボンの色デザインで張り合おうとしてきた。

セリーナにとって一番の係わりたくない人であった。

セリーナはポーシヤと取り巻き達が居なくなると溜息を付きまた社交場の奥へと向かって歩き出した。

暫く奥に向かって歩いて行くと遠目に窓際の休憩スペースに座り紅茶を飲んでいる2人の姿が見えた。2人の黒髪は遠くからでも目立ちセリーナは自分もあんな風に目立つのかと思うとそつと溜息を付いた。

2人の傍には少し身体の丸いご婦人とその娘だろうか同じ様に綺麗な金髪の少女が居た。セリーナがよつていくと母が気が付いたのか白い腕をそつと上げセリーナに振っているのが分った。

「セリーナ早かったわね… まだまだ戻らないと思っていたのよ。」母は優しく微笑むと隣に座るご婦人の方を向き末の娘のセリーナですわと紹介した。

セリーナが自分が紹介された事に気付き膝を軽く折って挨拶をするとそのふくよかなご婦人は嬉しそうに微笑み初めましてと挨拶した。

「貴女がセリーナさんね、お会い出来て良かったわ貸し本屋さんに行かれたと窺ってお会いできないと思っていましたの。」

「セリーナ、此方は准男爵のウェルズ夫人よ、そしてお嬢様のジエシカさん。」雪が紹介するとジエシカは同じ様に膝をちょこんと折って挨拶を返した。

「お会い出来て嬉しいですわウェルズ夫人、そしてお嬢さまのジエシカさん。」セリーナが嬉しそうに挨拶するとジエシカも嬉しそうに微笑を返し席に座るとセリーナに隣の席を勧めた。

「お会い出来て良かったですわ、ヴィオレット夫人から同じ年の娘さんが居ると教えて頂いていたのでお会いできたなって思っていましたの。」そう言うときジエシカはセリーナの為に紅茶を入れて進めてくれた。

セリーナもありがたくそれを受け取ると1口飲みお礼を言った。

「私、このシーズンに初めてロンドンに来たものですからまだお知り合いも居なくて、母が偶然ヴィオレット夫人にお会いする事が出来たものですから嬉しかったわ。」

「そうなんですか、私も今シーズンのロンドンに来てまだ日が浅かったのでお知り合いになれて嬉しいわ。」

2人は邪魔されること無くお互いの事を知り合うために社交場を腕を組んで歩き趣味やドレスの事などをゆっくりと話し合うことが出来た。

「セリーナさんは読書家なんですね、私は流行にはついて行けていなくて、宜しかったら今度素敵な本を紹介いただきたいわ。」ジエシカは嬉しそうに話すとセリーナを伴い近くのソファに腰掛けた。

「どうかセリーナと呼んでちょうだい。私も宜しかったらジエシカと呼ばせて頂きたいわ。」セリーナが恐る恐る言くとジエシカも嬉しそうに

「もちろん。セリーと呼んでもいいかしら？私はジェシーと呼んで。」と言った。

かくして2人は素敵な友情を育むべくお互いを愛称で呼ぶことにして明日、セリーナが約束の本を持ってジェシカのロンドンの家を訪ねることで一致した。

ヴィオレット一行はダイナーに十分間に合う時間に帰宅するべくウェルズ一家とお別れをして迎えに来た馬車で家路へと向かった…

「セリーナ今日は素敵なお友達が出来てよかったわね。」雪は嬉しそうに向かいに座るセリーナに言った。

「ほんとに、素敵なお嬢さんだったわね、あなたと同年だったかしら？とても優雅で感じのよい方だったわね、」ピアノも同意するように言い、仲良くなれるといいわねと付け加えた。

「ええ、ジェシーとは気が合うの、ドレスの趣味も何を美しいと思うかもね、お話していても楽しかったわ。」セリーナは嬉しそうに同意してその後は今日借りてきた本の話をして2人にしたが読書にあまり興味の無い2人は適当にセリーナの話の聞こえと興味をなくしたようだった。

家に帰り着くとセリーナは真っ先きに降りて執事が家を開けるのももどかしく一目散に自分の部屋に行くと今日会った素敵な人の名前をメモに書き忘れないように自分の机の引き出しにしまった。

スタンリー・ギャルウェイ様…また会えるかしら？…明日ジェシーに話してみよう。とても紳士的で優雅な方だったからもしかしたら貴族様かもしれないわ…貴族だったらジェシーも知っているかしら？

セリーナは引き出しからスタンリーの名前を書いたメモ用紙を取り出すとベットに横になりスタンリー様…と名前を呟き夢の中でもう一度会えますようにとお祈りをしてメモを枕の下にしまった…

第4章

翌日セリーナはマージが起こしに来る前に起き出しマージをビツクリさせた。

「お嬢様！ビツクリさせないで下さいませ！」マージは既にベツトから起床してカーテンを開けているセリーナの姿に驚きお湯の入ったポットを落としそうになりながら叫んだ。

「ああ、マージお早う、驚いた？」セリーナはマージの元に駆け寄るとお湯の入ったポットを受け取りながら尋ねた。

「勿論ですよ、いつも何度起こしても起きないお嬢様が私が来る前に起きていらっしやるなんて…寿命が縮む所ですよ。」マージはお湯のポットを持って洗面室に消えていくセリーナに聞えるように言つとセリーナの着替えを用意しに行った。

セリーナはご機嫌で戻つてくるとマージの用意したドレスを見て今日は出掛けるからこの前仕立てたグリーンのを出してちょうだいと頼んだ。

「お嬢様今日はとてもご機嫌が宜しいようで…楽しい事でもあるのですか？」マージはセリーナに服を着せながら尋ねた。

「ええ、今日は先日お知り合いになつたウェイルズ准男爵様のお家をお尋ねするの。」セリーナはドレスが自分に似合っているか鏡の前で点検しながら言つた。

「ああ、先日お戻りになった時奥様がセリーナ嬢様にお友達が出来たと教えてくださいました。」マージはセリーナの長い髪を梳きながら今日はどんな髪型になさいます？と尋ねながら言った。

「ええ、とっても優雅でお綺麗な方よ。今日は本を持って彼女を尋ねるのよ。」セリーナは嬉しそうに言うと言いつと髪を編みこんで残りを流すようなスタイルにしてと言うとマージに髪をセットされ気持ちよさそうに目を閉じた。

マージはセリーナが3歳位の時にやってきた侍女でビビアンと一緒に長いこと面倒を見てもらっているので家族のように気安くまたビビアンとセリーナの趣味や好みをよく分っており新参の侍女の面倒見もよかった。

セリーナは思ったとおりのお洒落をすると家の書庫に行きジェシカと約束した本を2、3冊抜き出すと朝食を慌しく食べ約束の時間20分前にウェイルズ准男爵家前に到着した。

「少し早かったかしら？」そう言いながら馬車を降りると従者から本を受け取りウェイルズ准男爵家のロンドンの別宅を見上げた。

准男爵家はバースの南方に領地を持っていて准男爵は議員も兼ねているので家風は古風で落ち着いた雰囲気のものとなっていた。

ロンドンの別宅も豪華なつくりではないが少し広い前庭と厳格な趣で扉は木製の重厚な物となっていた。

セリーナはそつとドアの傍の呼び鈴の紐を引くとドレスの裾を払い髪の毛が乱れていないか確認した。

直ぐに執事が現れ室内に通され名詞を渡しジェシカを呼んでもらうと入り口横の広めのウェイティングルームに腰掛けて待った。暫くするとジェシカが現れ2人は昨日のお互いの気持ちが変わっていないことを確認した。

「少し早かったかしら、ごめんなさいね。早く貴女にお会いしたくて昨日はあまり眠れませんでしたの…」セリーナは隣に座ったジェシカの綺麗なブルーの瞳を見ながら言った。

「まあ、私も昨日はあまり眠れ無かったの…貴女とお話したことを思い出して今日会えるのを楽しみにしてたのよ。」ジェシカも笑って言うと言の目の下を指差しほら少しクマが出来ているでしょ？と笑っていった。

2人は顔を見合わせてお互いのクマを見つけるとクスクスと笑った。

「朝から賑やかですね。」嬉しそうな声が入り口から聞えたので2人が振り向くと其処にはセリーナの見知らぬ男性が佇んでいた。

「エドワード兄様！」ジェシカがちよつと笑って呼びかけた。

「淑女の会話を盗み聞きとは紳士的ではありませんわよ。」ジェシカは笑ってエドワードに言った。

「ごめんなさい、セリー驚いたでしょ？この人は私の父方の従兄弟のエドワード・シエファードス兄様よ。」ジェシカが笑って紹介するとエドワードは座って見上げてくるセリーナの手袋をした右手にそつとキスをして自己紹介した。

「初めましてミスヴィオレット、ジェシカの従兄弟のエドワードと言います。昨日ジェシカに君の事を窺っていたので2人を一緒に散歩にでもお誘いしようと思って今日はお尋ねしました。」

セリーナはエドワードの紳士的な態度にちよつぱり頬を染めながら初めましてと挨拶した。

エドワードはライトブラウンの少しウェーブがかった髪をしていて瞳も髪より少し濃いヘーゼルだった。ジェシカの従兄弟だけあって目鼻立ちを整っており少し童顔で厚めのピンク色の唇がとても魅

力的な紳士であつた。

「エドワード兄様つたら…セリーナがビックリしているじゃない！今日は2人でゆっくりお話をしてショッピングにでも行こうと思つていたのに…」ジェシカはエドワードが2人の邪魔であるかのようになんげ怒つて言つた…

「じゃあ散歩がてら2人の買いものに付き合つよ。荷物持ちがいて楽だろう？」エドワードはジェシカの機嫌を取るように言つとジェシカの頭を撫でた。

「そうね、それなら構わないけど…2人の邪魔はしないでちょうだいよ。」最後は笑つて言つとジェシカはセリーナを立てたせエドワードの腕に絡めせると自分はエドワードの反対側の腕を取りこれで良いでしよと言つて早速出掛けましようとなんげ2人を促した。

3人は肌寒い屋外にコートとマフを着込み白い息を吐きながら楽しそうにハイドパークに向かって話をしながら歩いていった…

「今日はお天気があまりよくなかったわね。」ジェシカが言うとエドワードがロンドンなんていつもそんなものさと言った。

「ヴィオレット家のお家はどちらの方にあるの？」ジェシカがエドワードの反対側からちょこつと顔を出しセリーナに尋ねた。

「私の家はサウサンプトンの郊外よ、父が貿易商だから一番大きな港の在る町へ最近引っ越したところなの。今は郊外にあるコテッジに住んでいます。」セリーナはエドワードの腕に手を乗せているのだがドキドキしてしまってまともに捕まる事が出来なかった…

「サウサンプトンでしたら海軍駐屯地が多くて街は賑やかでしょうね？」エドワードはセリーナに優しく微笑みかけながら言った。

「ええ…街は軍隊や貿易でとても栄えていますわ、私の住んでいる辺りからは少し距離がありますのであまり行くことはありませんが…」セリーナはエドワードの優しい笑顔に少し頬を染めて俯いた。

第4章（後書き）

中途半端に続きます…長くなりそうなので此処で区切りました。

新しい独身紳士出現！！

エドワード・シェファーズ…男爵家の次男坊。ドーセット州のライ
村の牧師

第5章

「サウサンプトンの郊外と言われますとどの辺りですか？私の家の領地が隣のドーセット州にありますのでお近くなのでは？」エドワードは少し身を乗り出して尋ねた。

「サウサンプトンから馬車で1日位ですわ、父は港にも事務所がありますので…。ドーセットまででしたら近いと思います。」セリナは家の地理を思い出しながら答えた。

「そうですか…。では春になったら是非遊びに来てください、ジェシカ達も来ますので…。」

エドワードに家に招かれ白い頬を高揚させ頷いた。

「エドワード兄様あちらの洋装店に寄ってもいいかしら？あそこはこの辺では新しい生地を揃えてるそうなの。」ジェシカは嬉しそうにエドワードの腕を引っ張りながら早足で向かった…

女性2人は新しいドレスの生地を見たり帽子に飾る羽やリボンを物色して楽しい時間を過ごした。その間エドワードは2人に尋ねられるがままドレスの形や色デザインなどの意見を言い店を出る時に2人が見ていた淡いローズレッドのお揃いのリボンをプレゼントした。

セリーナは今年の新色と紹介されとても美しくて欲しいと思ったが手持ちのお金では買うことが出来ずジェシカと今度来た時にお揃いで買いましょうと言っていたリボンを贈られビックリしてエドワードを見つめた。

「まあ！ありがとうエドワード兄様！」ジェシカは嬉しそうに微笑むと早速お店の鏡で束ねてある自分の髪に結んだ。

セリーナにも付けてあげると言ってセリーナからリボンを受け取るうとするセリーナが困った顔で言った。

「エドワード様高価なりボンを頂いても宜しいのでしょうか？」セリーナは家族や義兄からしか花以外の物を贈られた事がなかったのでどうしたら良いか困ってしまった。

「せっかく貴女の為に購入したのですから貴女の美しい黒髪に飾ってください。」エドワードは優しく言うセリーナの肩に流れる長い黒髪をそっと一房触った。

セリーナはその言葉と行動にますます頬を染めて俯いてしまった。

「セリー、折角のエドワード兄様からのプレゼントだから頂きましょう？」ジェシカも優しく促したのでセリーナはありがとう御座

いますと小さく呟いた。

ジェシカがセリーナの編みこんだ髪にリボンを通し結んでやるとその姿を鏡で見てセリーナも嬉しそうにエドワードにお礼を言った。

3人は洋装店を後にして近くのカフェに入り冷えた身体を暖めることにした。

ちょうど午後のお茶の時間だったので3人は軽い軽食と紅茶を頼み休憩を楽しんだ。

「セリー、エドワード兄様はドーセット州のライという所の牧師をしているのよ、お兄様の実家は男爵家で浜辺の近くのボーンマスにお屋敷を持っていたらっしゃるの。私はいつも春になると母と一緒に遊びに行くのだけれどとても気候が穏やかで気持ちの良い場所よ……お兄様もおっしゃってただけど今年は貴女と一緒に行けたらとても嬉しいわ。」

ジェシカは毎春に其処を訪れていたが女性の従姉妹が居ないため少し寂しい思いをしていた。

「ええ…ありがとうございます。両親に聞いてみますわ、多分家からもそう遠くない距離ですからジェシカのご家族もいらっしゃるし許してくれると思います。」セリーナもジェシカと一緒に居られるならさぞや楽しいだろうと思ひ前向きに一緒にいきたい気持ちになつていた。

「ぜひいらして下さい、その時は私も教区から出て戻つて来られるようにしますから。」エドワードの嬉しそくに微笑む顔を見てセリーナはドキドキして俯いてしまった…。

…どうしましょう、私ったらエドワード様の笑顔を見ていると恥ずかしくなつてしまいますわ…けれどとてもお優しくって紳士的な方…。

セリーナはこんなに長い時間男性と話をしたことが無かつたのですっかり舞い上がつてしまつて頬を赤くしたり俯いたり自然に接することが出来ず戸惑つていた。

…半時ほどするとジェシカがもうこんな時間ねといって店を出て

家に帰ることにした。ディナーの時間（この時代のディナーは3時から4時頃。）に間に合うようにと2人がセリーナを家まで送ってくれ門の所でまた明日もジェシカに会いに行く約束をすると分かれた…

セリーナは2人と別れ自宅のダイニングのソファに座るとどつと疲れたような気がしてクッションにもたれ横になった…

わたしったらすっかり緊張してしまつてジェシカと話そうと思つていたことを全然話せなかったわ…明日もエドワード様もいらつしやるのかしら？緊張してしまつてすっかりとした返事も出来なかったし…大人しい子に思われてしまつたかも…

セリーナはそつとりボンを解くとじつと見つめ初めての異性からのプレゼントに嬉しくなつた…

社交界にデビューして2年たつがいつも緊張してしまつてダンスを申し込んでくれた相手の顔をろくに見ることも出来ず真つ赤になつてしまつた自分に何度も誘ってくれる男性はほとんど居なかつた…みな珍しい髪色と瞳の色と東洋人のハーフと言つことで興味本位に話しかけてくるだけで受け答えもろくに出来ず爵位も無い自分には興味もつづか無かつたようだ…

恋もしたことが無く男性と長時間一緒に過ごしたことの無いセリーナにとって今日の一日は驚くべきことで優しく笑いかけてくれるエドワードの存在は大きいものだった…

昨日の美しい紳士…正に貴族風のスタンリーも優しく穏やかな少年の様な微笑のエドワードといいセリーナにとって昨日から心臓のドキドキが止まらない2日間であった…

第5章（後書き）

ジェシカには3歳年の離れた弟が居ますあと4歳下の妹。ロンドンには着いてこそ領地で乳母と一緒に留守番です。

第6章

今日も同じ様にモーニングを少し過ぎた時間にセリーナはジェシカの家を訪れていた。今日は広いリビングで暖炉の前に2人で座り込んで話をしていた。

ウェイルズ夫人はソファに座ってそんな2人を微笑ましそうに眺めながら趣味の刺繍に精を出していた。

セリーナはジェシカと昨日の話をしていた。

「ジェシー、今日はエドワード様はお出かけ？」セリーナは何の気もないようにさり気なく尋ねた。

「エドワード兄様？今日はお友達の方と一緒に朝からお出かけよ、兄様に会いたかったの？」ジェシカは何の気なしに聞いてみた。

「え？イエ…そうじゃなくて…昨日のお礼もちゃんと伝えていないような気がして…」心なしかセリーナの頬が染まっているように見えた。

ジェシカはソファで刺繍をする母を見やるとウトウトしている様なのでセリーナに身を寄せ小声で話しかけてきた。

「ねえ、セリーには心に思う方がいらっしやるの??」ジェシカはちよつと恥ずかしそうにしながらしかし瞳を輝かせて尋ねた。

「え?心に思う方!??」セリーナはビックリして何の事だか分らなかったのだ。

「お慕いしている方がいらっしやるのかなって思ってた…」ジェシカはあまりにセリーナがビックリしたのでモゴモゴと口籠ってしまった…

「お慕いしている方…その様な方いらっしやらないわ…」セリーナは恥ずかしそうに頬を染めると俯いてしまった。

「そうなの…ねえ、エドワード兄様の事はどう思ってた?従姉妹の私が言うのもなんだけどお兄様はとても紳士的で優しい方よ、私セリーとお兄様はお似合いなんじゃないかと思って」ジェシカはウフフと微笑みながらセリーナの様子を窺った…

「そ、そんな…エドワード様に失礼だわ、私なんてあんな素敵な方には似合わないわ」慌てて肯定の言葉を口にするセリーナの様子を見てジェシカは笑い出した。

「冗談よ、そんなに真剣に否定しないで。でも似合うつて言ったのは本当よ、お兄様もあなたの事を可愛らしいつて言っていたもの。」ジェシカは目の端を拭ってセリーナの握るとごめんなさいねと言った。

「ジェシー、からかわないでちょうだい!」セリーナは握られたジェシカの手を軽く叩くともうと言って笑った。

「そういうジェシーは何方かいらっしやるの??」今度はセリーナが仕返しとばかりに身を寄せて聞いた。

「実はね…」そう言つとジェシカは母がちゃんとたた寝しているか確認して母に背を向けてセリーナに耳打ちした。

「実は去年エドワードお兄様のお屋敷に遊びに行ったときに叔父様が開いてくださった舞踏会でとても素敵な人にお会いたの…」ジェシカはポツと頬を染めると興味心身で聞いているセリーナの手を取り続きは私の部屋で話しましょと言つてセリーナを2階の自室へと連れて行つた。

自室の前に着くとジェシカはセリーナに向き直り、

「この話は誰にも内緒よ!エドワード兄様にも!」と言つてセリーナを自室に案内するとベットの端に座り続きを話し始めた。

「初めてお会したのはその舞踏会のとときでエドワードお兄様の

ご友人として紹介されたの、そのときに2回ダンスを踊ってくださいって……」ジェシカはその時を思い出したのか夢見るような表情になった。

「それで？どんな方なの？」セリーナが先を促してジェシカの意識をこちらに戻した。

「ええ、それでねわたししたら緊張してしまつてあんまり大した事をお話できなかったの、今日の舞踏会の事とかエドワード兄様の事とか……」ジェシカはあからさまにシュントした表情になった。

「お名前はジュード・マールウ様……マールウ子爵の令息……濃いダークブラウンの髪に瞳の色は薄くアンバー……ポロが得意でいらしやつて馬を可愛がつているそうよ……」

「初めて聞くお名前だわ……マールウ子爵様は何度か聞いた事があるんだけど……」セリーナは思い出すように眉間にしわを寄せていた。

「とってもおもてになつて色々な噂話を聞いた事があるわ……どれもあまり良い物ではないけどね」ジェシカはくすりと笑つとセリーナの眉間の皺を指で伸ばした。

「それつて……浮気ものつて事？そんな男性貴女には相応しくないわ！」セリーナはムキになつて言った。

「そんな心配要らないわ、私の事なんてどうせ覚えていらつしやらないわ…私の片思いよ…」俯き寂しそうなジェシカの表情を見てセリーナも悲しくなった…

「それでセリーはどうなの？気になる方とかいらつしやらないの？もしかして本当にエドワード兄様に恋してた？」ジェシカはパツと顔をあげるとセリーナの手を握った。

「それなら私協力してよ！！」ジェシカの顔は先程とは違ってキラキラ輝いていた。

「え！！そんな…確かにエドワード様はとても素敵な方だけど…気になるとかそんなじゃないわ…ただ素敵だなあと思っているだけで…」顔を赤くしながらぼそと話すセリーナを見てジェシカはそうなの…貴女と親戚になれると思ったのにと笑って軽口を叩いた。

「あ、でも…気になるとかそんなじゃないんだけど…少し素敵だなと思う方が…」セリーナが思い出したように顔を上げジェシカを見つめた。

「どなたの事？」ジェシカはセリーナに続けさせようと促した。

「ええ…先日、あなたに会う前よ。貸し本屋に行った時なんだけど…」

セリーナは恥ずかしいとは思いつつ貸し本屋で偶然会って隣に腰掛けた男性についてジェシカに詳しく話して知っているか尋ねた。

「スタンリー・ギャルウェイ様…爵位までは分らなかった？」そうジェシカに問われセリーナは一生懸命彼の特徴を話した。

「…髪は金に近いブラウンで瞳の色は濃い青…スタンリー様…」
ジェシカは必死に思い出しているようであった…

「…ごめんなさい、力になれそうに無いわ…」ジェシカの悲しげな表情を見て気にしないでと言ったもののセリーナも心が沈んでいくのを感じた。

「でも貸し本屋さんでお会いしたのならまたロンドンでお会いできるんじゃないかしら？明日その貸し本屋さんに2人で行って見ない？」ジェシカはセリーナを元気付けようと提案した。

「…ええ、そうね。もしかしたらまたお会いできるかも！」セリーナはジェシカの提案に元気付けられ明日が楽しみねと笑顔になった…

第7章

2人はモーニングを済ますと意気揚々と貸し本屋へと向かった…

「セリー？どの辺りで見かけたの？」ジェシカは到着早々セリーナの腕を引きキョロキョロと辺りを見回した。

「ええ…あ！あそこ！」セリーナは小声で本棚の方を指差すとジェシカがあっちなと言ってセリーナの腕をひっぱって行った…

「うゝん残念…」本棚からそつとソファの方を窺うと其処には誰も居なかった…

セリーナも早朝でもあるしいつも居る訳でもないだろうから期待はしていなかったが心の隅ではかなりがっかりしていた。

「…まあそんなに直ぐにお見かけ出来るとは思っていなかったからね…」ジェシカは小さくフンと鼻を鳴らすと慌てて口元を隠しセリーナを振り返った。

「まあ…セリー…そんなにガツカリしないでちょうだい…」セリーナの明らかに落胆している表情を見てジェシカはそんなセリーナをいじらしく思った。

「セリーナ…元氣を出して？ロンドンは広いんだし、まだ社交場も廻ってないじゃない…きつとまた会えるわ」ジェシカはセリーナの手を優しく握るとさあ次は社交場を廻ってみましようと言顔を見せた。

「そうね…ええ、行きましよう」セリーナも微笑むと2人は腕を組みロンドンの有名な社交場を探しに行った…。

2人は1日かけて4つの社交場とパークを廻ってみたが目的の人物を見つける事が出来ずジェシカの家のソファに凭れ深い溜息をついていた…

「まあまあ2人とも朝から出かけてどちらにいらしていたの？」
ウェイルズ夫人が暖かい紅茶を入れたカップを2人に渡しながら尋ねた。

「ええ…ちよつとロンドンを2人で散歩していたの…遠くまで行き過ぎてしまつて疲れてしまつたわ」ジェシカがカップを受け取り有難そうに1口すすった。

「そう…淑女が2人で遠出なんて褒められたものではないでしょう」ウエイルズ夫人は小言を言いながらサイドテーブルに置かれた手紙の束を手に取り中身を見始めた。

「セリー今日は無駄足だったわね…一体セリーナの思い人様はロンドンの何処にいらっしゃるのかしら」ジェシカは溜息をつき窓の外を眺めた。

セリーナも溜息をつきジェシカの視線の先と一緒に眺めていた…

「ジェシー、ロナウド子爵様のお宅で開かれる舞踏会の招待状が届いているわ…お招きくださったのね…」ウエイルズ夫人はニコニコと微笑みながら興味無さそうにしているジェシカに渡した。

「ロナウド子爵様…お会いした事ないわ」

「ロナウド子爵様の舞踏会の招待状？ジェシカ、貴女も招待されたのね！」セリーナが嬉しそうにジェシカの手を握った。

「ロナウド子爵様宅で開かれる舞踏会は冬のロンドンで開かれる舞踏会の中でも指折りの大きさよ、私も去年ご招待を受けて伺ったけれどとても賑やかで楽しかったわ…お昼から開かれるのだけど去年はまだ子供だからといってイブニング前には母につれて帰らされてしまったけれど…夜はお酒も出てとても華やかだそうよ…」セリーナは思い出してるのかウツトリと窓の外を見ている。

「そうなの…お母様、セリーナもご招待を受けているようですし私も行ってもいいかしら？」ジェシカは郵便の確認をしている母に甘えてお願いした。

「ええ…お父様に相談してみるけど多分いいとおっしゃって下さると思うわ」ウェルズ夫人は嬉しそうに微笑むと手紙をキッチンと置むとお返事を書かなくてはとダイニングを出て行った…

「セリー今年は夜まで一緒に楽しめそうね！」ジェシカはキラキラした瞳でセリーナを見た。

「ええ、両親に聞いて見なくてはだけど…貴女と一緒にだったら良いと言ってくれると思うわ」セリーナも嬉しそうにジェシカに微笑んだ。

それから2人は両親に舞踏会の出席の許可を取ると何を着てくか、髪型はどうするかと準備を楽しく進めていった…

「セリー、当日のエスコートはどうする予定なの？」ジェシカが侍女に試しに結ってもらった髪型を鏡の前でチェックしながら尋ねた。

「え？エスコート…特に考えていなかったわ、母もいるし…」セ

リーナは特に気にしていないといった感じで見ていた本に視線を戻した。

「そう…やっぱりね。ねえ、エドワード兄様も行かれるんだけど母達の変わりにエスコートをお願いしようと思っているの」

セリーナはジェシカの突然の提案にビックリして振り返った。

「お兄様はきつと否とは仰らないわ、母達と一緒に居るのもいいけれどセリーナと初めて舞踏会に行くのだからしっかりとしたエスコートが居る方がいろいろな方のご紹介も受けやすいと思わない？」ジェシカは自分の髪型が気に入ったのか仕上げにリボンを結ぶと嬉しそうに振り返った。

「それはそうだけど…エドワード様は嫌がらないかしら？」セリーナは心配そうに呟いた。

「大丈夫よ！私がお願いしておくから任せてちょうだい！」ジェシカの中では決定事項なのか決まりねと言って今度はセリーナの髪型を決めようと言って鏡の前に座らせるとその髪を弄り出した。

第8章

セリーナは舞踏会の当日母親と共にジェシカの家を訪れ共にエドワードと合流しロナウド子爵邸に向かった。道中の馬車は若い者達と母親のグループに別れ片方は1日掛けて行われる舞踏会へと胸を膨らましもう一方は穏やかに世間話に花を咲かせていた。

ロナウド子爵邸に到着すると其処には招待客の馬車が列を成し順番に正面玄関へと通され従者に迎え入れられていた。

セリーナとジェシカはエドワードに手を引かれ馬車から降りると素晴らしい屋敷の中に目を奪われた。

「セリー…とっても美しいお屋敷ね、ロンドン郊外にこんなに素敵なお屋敷を持ってらっしゃるなんて流石ロナウド子爵様だわ…」

「ええ、私も去年来た時にはお屋敷の素晴らしさに目を奪われたわ…お部屋も素敵だけど子爵夫人のお庭もとっても素敵よ、今は冬だからクリスマスローズの咲くお庭が見頃だと思うわ…」

セリーナはキョロキョロと見回すジェシカの腕を取るとエドワードにエスコートされロナウド子爵夫妻と令嬢に挨拶を待つ列に並んだ。

挨拶が済むとセリーナ一行はあてがわれた部屋へと侍女に案内され1泊のみ過ごす為の荷物を解いた。

コンコンコン…

静かなノックの後コートを羽織り狐の毛皮の襟巻きとマフを持ったセリーナがジェシカの部屋に現れた。

「ジェシー、荷解きが済んだらお茶の時間までお庭の散策をしない？」

「セリー、実は届いた荷物が別の方の物で今私達の荷物を探して頂いている所なのよ」困った顔で溜息をつきながらジェシカは振り返った。

「そうなの…大変ね」心配そうにセリーナが言つとウェイルズ夫人が紅茶を飲みながら直ぐに見つかると思うわとのんびりと言った。

「直ぐに追いつくからお庭で待っていてちょうだい、取り合えず着替えて上着を羽織ったら貴女を探しに行くわ」ジェシカも母の隣に腰掛けるとどうする事もできないと言うように両手を天に向けやれやれと首を振った。

「ええ…分ったわ、お庭で待っているから直ぐ来てちょうだいね。寂しいから」そう言うときセリーナは襟巻きを首に巻き後でねと手を振り庭へと向かった…

庭は思ったよりも寒々としており誰も歩いておらずベンチに座る気にもなれずセリーナは去年ロナウド子爵夫人に教えてもらったクリスマスローズの庭へとうる覚えの記憶を頼りに足早に向かった……

暫く歩いたが目的の庭に中々たどり付く事が出来ず辺りは生垣に覆われ徐々に道幅が狭くなり1本道へと変化していった…

どうしよう…道に迷ってしまったみたい…セリーナは生垣の1本道を進みながら引き返そうか迷っていた…

歩いてても歩いてても先が見えないので仕方なく引き返し着た道を戻っていったつもりだったのだが途中で生垣は2手3手に別れ本格的に庭園の迷路に嵌ってしまった。

はぁと溜息をつき誰かとすれ違わないか、迷路の出口はないかと当ても無く彷徨っていると行く手に生垣が開け小さな噴水が在るのが見えた。

こじんまりとした噴水だが作りがとても凝っていて3段に水が流れ落ちる仕組みになっており中央の塔に人魚の像がありその像の持った巻貝から水が溢れていた。

よく見るとその貝も人魚の鱗も美しい貝殻で出来ていた。

溢れた水がたまり円形の噴水は周りがベンチの様に腰掛けられる作りとなっていた。歩き疲れたセリーナは有難くひんやりとした台座に腰掛暫くどうした物かと物思いに耽っていた。

どうしよう…すっかり迷路に迷ってしまったわ…ジエシカがきつと心配してるでしょうね。もしかしたら気がついて探しに来てくれるかも？迷子になったら動くなって言っし…後少し待っても誰も来ないようなら入って来た所から出口を探してみようかしら…

セリーナは留まるべきか出口を探すべきか悩んでいると噴水の水の中を泳ぐ金魚に気がついた。

まあこんなに寒いのに氷の下でも金魚が生きているのね…マフから手を出しそつと氷を突くと金魚はビックリしたのかさつと泳いで蓮の葉の下に隠れてしまった…

セリーナは珍しい金魚の可愛い様子に目を奪われ暫く金魚の様子を見て楽しんでいた…どれほど時間が過ぎた頃だろう？何か歩いてくる物音がしてセリーナはビックリして立ち上がって音の方を窺った。

生垣の割れ目から背の高いダークブラウンの髪をした1人の青年が姿を現した。セリーナの姿にひどく驚いたのか身を引くように足を止めてセリーナを凝視している。

「…失礼、誰も居ないものと思ったので…貴女は？何方かな？」
青年は近づく事もせず遠巻きにセリーナを不躰にじろじろと見ている…

「すみません…道に迷ってしまっ…」セリーナは不安げに青年を見ていたが相手の威圧的な空気にすっかり不安になってしまっ…て俯いた。

「そうですか…お嬢さん宜しかった出口までご案内いたしまし…う。」言葉使いは優しいが手を差し出すわけがなくセリーナを見つめ立ち去る事を要求しているように見えた。

「いえ、済みません。道さえ教えていただけたら一人で戻れますので…」俯いたままセリーナが呟くとチツと舌打ちする音が聞えますます身を強張らせた。

「お嬢さん、貴女は道に迷ったわけだ、此処から屋敷に無事に戻れる自信も無いのに強がりと言うのは賢明ではない」

そう言う青年はセリーナの元に大腿で近寄るとセリーナの顎を掴んで顔を上げさせ顔を覗き込んだ。

その強引な仕草にビックリして目を見開くと青年の薄いアンバーの目と目が合った。その強い瞳に見返されセリーナは身動きできず2人は暫し見つめ合った…

中々青年が掴んだ顎を離さなかったためセリーナは青年の胸に手をやるとぐいっと押しやり目を逸らした。

「失礼…」そう言う青年は背を向けて歩き出していった…

セリーナがあっけに取られて後姿を見つめていると青年が振り返り合えり早く来ないと置いて行きますよと冷たく言い放った。

セリーナが慌てて小走りで追いかけるとその様子を一瞥し待つてくれる訳でもなくさっさと歩き出して行ってしまった…

なんて無礼で紳士的ではない方かしら！セリーナは息を切らしながらドレスの裾を掴み小走りで青年を追いかけると聞えないようにブツブツと悪態をつき青年の後姿を睨み付けた。

「何かおつしゃいましたか？」青年は突然立ち止まり後ろを振り返ると少し息を切らしたセリーナを冷たく見つめた。

「い、いえ別に…その、追いつくのが大変なのでもう少しゆっくりと歩いては頂けませんか？」セリーナが追いつき懇願すると青年はニヤツと口の端を歪め笑うとセリーナに1歩近寄った。

「失礼、ご令嬢方は少し早歩きするのもままならない物でしたね」

その言い方にムツとしたセリーナはアンバーの目を睨み返すところ位の速さ別に構いませんと強がりと言った。

「そんな強がりをおつしゃっていいのですか？息が上がっていますよ？」

青年は更に小ばかにした様に笑うとセリーナの手を取って自分の腕に絡めせると殊更ゆっくりとした歩調で屋敷に向かって歩き出した。

セリーナは馬鹿にされているのが判ったので自分の腕を引き抜こうとしたが強い力で掴まれてしまい引き離す事もできず顔を憤りで真っ赤にして隣を歩く青年を睨み上げた。

青年はセリーナの方を1度も見ることもなくゆっくりとした歩調

でしかしセリーナの腕を取る力は緩めずに黙々と屋敷に向かって行
った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2509v/>

キセキ

2011年10月9日00時14分発行